

地区クラブ奉仕委員会

監修：委員長 吉村 武文（延 岡）

執筆：委員 右田 道夫（熊本南）

“：” 黒木 健夫（別府東）

執筆：委員 外山 三郎（宮崎北）

“：” 大久保 幸（鹿 屋）

“：” 渡辺潤二郎（日 南）

ロータリー生誕の社会的背景（中）

委員 右田 道夫

ポール・ハリスはその著“ヂス・ロータリアン・エイジ（米山梅吉訳・ロータリーの理想と友愛）”の中で「ロータリーの如き運動の発芽期としては20世紀の初頭ほど絶好の時期はなく、同時にそれを育成して確固たる方向を示すべき土地としては、シカゴの地ほど適切な都市は無かった」と述べている。

そのシカゴという町は、本来は開拓者の部落にすぎなかったが、ミシガン湖の南端近くに位して、水運の便に恵まれ、大陸貫通の直線に接近した水陸の要街で、急速に発展した新興都市であった。南北戦争後の4半世紀中に、シカゴは開拓者の部落から将来有望の新興都市へと一挙に発達した。

そして1870年オーレアリー夫人が飼っていた牛がランプを蹴飛ばし大火災に見舞われ、シカゴの街は殆んど鳥有に歸した。ニュー・イングランドの数箇の火災保険会社が破産したという大災害であった。

また南北戦争のあと、米国では政治権力を獲得した北部資本が急速な展開をみせた。そのかげで労働者は低賃金と長時間労働を強いられ、政情不安なヨーロッパからの移民の洪水が、労働条件の悪化に拍車をかけた。

労働運動の拠点シカゴでは労働者と警官隊の衝突が繰返えされるうちに、8時間労働を目ざしたゼネスト宣言が打ち出され、1886年5月1日には5万8千人の労働者がストに参加し、3日の後には多数の死傷者を出したヘイ・マーケット・ライオット（暴動）にまでエスカレートしたのである。

1893年には全米に大恐慌がおとづれた。この恐慌では8千の会社がつぶれ、156の鉄道会社が倒産し、4百の銀行が閉鎖され、失業率は20%に達した。

大火災の傷あと未だ消えさらないうちに、大恐慌の到来というダブルパンチを受けたシカゴの街は、道徳地を払い、まさに悪徳と腐敗の街と化した。人々は生きるか死ぬか、仇敵のように斗いあった。獄舎は扉のおりぬままでに充満した。食うに困って獄舎につながれるために、敢えて軽犯罪を犯す者すらいたという。

当時アメリカの社会的腐敗の色々を暴露するMuck raking 運動というのがあった。その一人アプトン・シンクレアは“ザ・ジャングル”の中でシカゴの製肉工場の模様を「ハム全体が腐敗すると1分間24回の回転機で切断し、半トンほどの他の肉を混入すれば、ハムの臭みはどんなにひどくても消えてしまう。……倉庫に高く積まれた肉があり、そのうえには天井から雨もりのしずくが落ちてくるし、何千という鼠が肉の上をかけ廻っている……」と描写している。

商人の良心も、道徳の一カケラもなく、ただ儲ける為にのみアクセクし、儲ける為には手段を選ばなかった。

ポールハリスは「ロータリーの如きものは一層朗らかな空の下に、一層おだやかな気候の下に、しかして精神的動揺のない都会に生れいづべきものであると考えることは無理ではない。然し他面からみればシカゴの如き物情騒然たりし都会こそロータリー運動の発祥地として最適の地であった」と述べている。（次回はいよいよロータリーの創生に移る）